

一、設我得佛

成仏の願

「設我得佛」・・・設い我佛を得たらんに。この願文最初の一句は、法蔵菩薩の、成仏の願心を全的に表されたものである。

佛教の教ふる所によれば、菩薩とは、真如界より生れたるものである。或は、正しく真如界に向つて生きる者のことである。この真如界より来たれる者、真如界に向つて生きる者、この二者は根本において二つではない。その同一の相は、いずれも成佛の願いを持つことである。而して成仏の願いは、彼岸の真如界においては、意味を持たぬことである。即ち、現実人生においてのみ、意味があるのである。現実には、永遠に生死動乱の巷であり、罪惡穢染の煩惱に充ちた世界だからである。仏ならぬ我、浄土ならぬ現実が痛まれない所には、莊嚴浄土の願も、絶対人格の成就完成、即ち成仏の願いも、起らないからである。誠に生死罪濁の現実こそは、菩薩の誕生する現実的根拠である。

然しながら、罪惡煩惱は虚妄であり、無明である限り、決して成仏の願を持つものではない。成仏の願心が、純粹至純なものである限り、その願心は清浄、真実なるものに根拠を持たなければならぬ。一般に、成仏の願心は、仏性そのものと云われるが、仏性の現実の態(すがた)、即ち、因において謂わば大信であり、果に究竟じて云わば、涅槃真如であることを、親鸞において学べる我らは、菩薩の成佛の願心は、唯、眞如界より生れるものであり、その本質は涅槃であることを知るものである。

涅槃に住するものは佛である。然し、涅槃経の、「如来は実に畢竟じて涅槃し給はず、是を菩薩と名づく。」を想起する時、現実人生に於いて、成佛の願いをおこす法蔵菩薩の背景は、涅槃であることを容易に知ることが出来る。即ち、菩薩の願心は、不滅絶封の實在に根拠があつてのみ、生起するものである。

親鸞聖人は、如来の本願を説ける大無量寿経を、信眼によつて、達読して、
「弥陀成佛のこのかたは いまに十劫とときたれど 塵點久遠劫よりも ひさしき
仏とみえたもう」

と、法蔵願心の普遍大を、久遠実成の法身に求められたのである。

誠に人生の現実の流れで、美しき蓮華の花を咲かしめる大悲は、それが涅槃の内奥に、その根源を有することによつてのみ、よく現実の全てを否定して、成佛の願心となることが出来るのである。

願の内的風光

かくて、成仏の願は、現実人生を離れては意味を持たないし、人生を超絶せる涅槃に根拠がなくては不可能である。

法蔵菩薩は、師仏世自在王如来にむかつて、

「唯然り、世尊、我無上正覚の心を発せり。願はくは仏、我が為に広く経法を宣べ給え。我、当に修行して、仏国の清浄莊嚴無量の妙土を撰取すべし。我をして世に於いて、速に正覚を成じ、諸の生死勤苦の本を抜かしめ給え。」

と告げられてある。

即ち、法蔵の生命は「我、無上正覚の心を発す」所にのみあり。而して、この願心は「生死勤苦」の中においてのみ発される。しかも、生死の苦を諦観するものは、必ず「諸の生死勤苦の本を抜かしたまえ。」と願わざるを得ない。生死勤苦の本を抜くこと自体が、「世の於いて、速やかに正覚を成ずる」ことによつてのみ、なされるのである。

故に法蔵の心は、限りなき生死の闇を知り、罪惡煩惱を内観する心である。

誠に衆生煩惱は、限りなき闇そのものである。

眼・耳・鼻・舌・身・意の六根は、雑多なる八万四千の刺激を受け入れて、それと一々問答し、自自然発生的に躍り狂つて止まぬものである。一般に、そこに起こす、自然発生的な心の心身の動きを、欲というのであるが、その貪欲、貪愛が、逆境にあつては、瞋恚憎惡の炎となつて燃えさかり、順境にあつては、我慢を増長するのである。而して、この貪欲、瞋恚は、愚痴と離れたものではないから三毒と呼ばれる。大地の群萌はこの三毒に狂つて、自他を苦しめつつ、然も、惡を惡と知らず、煩惱を煩惱と知らぬこと、火が自ら熱いと感じず、水が自ら冷たきを知らぬと同一である。

かくて、群萌は「欲」はあつても、「願」は持たぬものである。三毒の煩惱は、それ自体が無明であり、虚妄であつて真実ではない。

願は、この無明を無明と知り、虚妄を虚妄と観する一面を持つ限り、我及び人生を否定する眞實であり、光明でなくてはならない。而して、かかる我及び人生の否定は、前述の如く、絶対眞實なる涅槃より等流する生命の力によつてのみ、なされるのである。

一般に菩薩は、その生れ出でたる故郷なる真如界を憶念して、三昧に住すと云われ、生死海に大悲同感して大悲を發すと云はれる。智慧によるが故に、涅槃に通ずるのであり、慈悲によるが故に、生死界に同感するのである。

捏築からの智慧光によらねば、現実の否定はおこらない。大悲によるなければ、現実生死界の摂取同感はあり得ない。凡夫は、生死煩惱の中にいつつも、煩惱と水油相逆らうものであり、苦惱の中にいながら、人生の否定を知らぬものである。即ち、飽くことなき樂を追求し、苦を逃避して、いよいよ貪愛に陥り、益々苦惱に陥つて、果てしなきものである。

彼岸より人生に還相して、成仏の願を發す法蔵の大慈悲のみが、闇を闇と知り、貪欲を清浄ならざるもの、瞋恚を眞實ならざるものと観じ得るが故に、成佛の志願をおこし得るのである。誠に法蔵の願心のみが、生死を生死と知り、涅槃を涅槃と知り得るのである。